

気づく感覚を取り戻す

2022・11・4 重枝 一郎

昨日のチャレンジテスト会・教育講演会の準備実施ありがとうございました。保護者の方々もとても喜んでいただけてみなさん笑顔でした。それもいろんな場面で関わってくださった先生方のおかげです。感謝します。また、アンケート等は秋のOSの時のように、スラックで全員に見てもらおうようにします。役割分担はありますが、全員でそれぞれの頑張り共有出来たらと思うからです。よろしくお願いいたします。今号の「気づく感覚」にもつながると思います。

今年度の「Sense of Mission 6月号」で「小さな行動」という話を書いた。

それは、キャリア形成においての2つのキーワードである「情報」と「行動」の話である。「情報」は、今の情報化社会において差がないと言っていい。つまり「行動」で差が出る。「行動」でも、特に「小さな行動」が重要な意味をもつ。「小さな行動」することで得られる“自分だけの情報”で差が出るという話である。

この「行動」についてだが、生徒が「小さな行動」をする際も、特別なことをしている気負い感があるように思うときがある。どこでも、どんな体験からでもできるのだが、正解や他者との比較にとらわれているような気がする。

そんなとき、あるワークショップの実践を読んだ。タイトルは「いつもの学校で感性の扉は開く」というものであった。

このワークショップは、まずは、校舎の周りをふらふら歩き、なんとなく気になるものを写真に撮る。「映え、ググる」は禁止で自分の感度に素直になることが条件である。でも生徒は気になるものがわからず戸惑う。そんな中、次第にとりあえず写真を撮り始める。ファシリテーターの先生が「歩くという字は『少』し『止』ると書く。何かに気づいたらとりあえず写真を撮ろう。映えない写真でOK」と声をかけていた。

次に、撮った写真の中から1枚選んで、見たままスケッチする。生徒は自分で感じたまま、細部にこだわって何かを表現しようとする。

最後に、何を描いたのか、どこが気になったのか発表する。発表をするときに素直に何かを見つける気づきや、何かにつながっていく気づきを感じ取る。

この実践を読んで、私は、構えずに気になるものを見つける、誰もがもっている好奇心を呼び起こすことは大切なことだと思った。そのことで、**気づく感覚を取り戻したり、気づく力を鍛えたりできると思う。**このことは人に対する気持ちの部分にも関係すると思った。

人の発達段階において、人にはそもそも誰にでも好奇心がある。幼児期前期（2～4歳）は拡散的好奇心と言われ、赤ちゃんが何でも口に入れたり、触ったりするようなことを言う。その時、親は、当然安全確保が大切な支援になる。幼児期後期（4～6歳）になると特殊的好奇心と言われ、例えば、昆虫に興味をもつとかボール遊びに興味をもつようなことを言う。その時、親は、昆虫図鑑を与えたり、野球を教えたりして刺激し、共感する支援になる。この幼児期の「好奇心」を充足させることは、中高生年代での自ら学ぶ意欲の中核の形成にも影響すると言われている。

このことから、このワークショップは、**気づく感覚を取り戻す方法の一つになると**

思った。

このワークショップにおいて「『問い』や『違和感のあるもの』を発見して」などと言うと生徒に妙なスイッチが入ることが多いと言う。つまり、生徒は、型にはまりたがったり、何かの答えに寄せたがったりする。そこで「なんとなく、とりあえず、あてもなく」の3つの声かけが、生徒の心をオープンにして気づく感覚を取り戻すことになると言う。「実に面白い（福山雅治風）」。

これからは「情報」で得られる知識よりも、「行動」で得られる経験資産が求められる時代である。「小さな行動」をすることで得られる自ら気づいた経験が大切になる。客観的に観察する力と自分で感じたことをつなげていく。気づく力を鍛えていく。この力が、生徒たちがこれから何かをするときの基礎力になると思う。また、私たちが以前話した「アンラーン（校長研修だより 70号）」をすることも、気づく感覚を取り戻す一つの方法になる。

アンラーン；ある事象に対してすでに身に付けた知識や見方を保留して、新たな目にとらえ直す試み。「学びほぐし」と言ったりもする。